

ロシア＝地中海関係史の一断面

— 15世紀のロシアとイタリア人 —

松木 栄三

1

15世紀のロシアはすでにタタールの覇権を脱し、モスクワを中心に統一国家として再成しつつあった。それゆえヨーロッパ人はこの国を《モスコヴィア》と呼んだ。奇妙なことに、この新生モスコヴィアに密接な政治的、経済的交渉をもった最初のヨーロッパの国は遠い地中海のイタリアであった。タルタリアの一角に誕生したこの国の実情を逸早く把握し、熱心にヨーロッパに紹介したのはヴェネチアやローマ教皇庁であり、要するにイタリア人であった。⁽¹⁾ ジェノヴァやヴェネチアが黒海北岸の植民地を拠点に北部ロシアとの接触を開始したのは、遅くとも14世紀のことである。⁽²⁾

15世紀のモスクワを訪れ、あるいはそこに住んだヨーロッパ人で最も目立ったのは、ロシアの年代記が《フリャジン》と呼ぶイタリア人であった。⁽³⁾ 当時のモスクワ人にとって、西欧はイタリア人に代表されていた。そのため15世紀ロシアのフリャジンは、しばしばイタリア人だけでなく西ヨーロッパ出身の外国人一般を意味する場合もあった。⁽⁴⁾ それはちょうど、16-17世紀のロシア人にとって《ネムツィ》(ドイツ人)が西欧人一般の代名詞だったのと同じである。⁽⁵⁾

モスコヴィアに関する西ヨーロッパ人の記録と紹介が本格的になるのは、たしかに16世紀に入ってからのことである。西欧の使節、商人、旅行家等によるロシア見聞録をもとにして書かれ

たプラトノフの『モスクワと西欧』(1925)⁽⁶⁾も、それゆえ16世紀から始められている。クリュチェフスキーが『モスクワ国家についての外国人たちの見聞』(1918)で利用している記録も、16世紀では17点、17世紀では15点があるのに、15世紀についてはランノア(Guillebert de Lannoy)、バルバロ(Iosaphat Barbaro)、コンタリニ(Ambrogio Contarini)の3人のものがあるにすぎない。⁽⁷⁾ それゆえモスクワ国家と西欧との接触それ自体も、しばしば16世紀から始まるものと誤解される。しかし、15世紀末に偶然モスクワに來たドイツ人騎士ポッペル某が、フリードリヒ3世に自分がモスクワ国家を「発見」したと報告し、また再度モスクワを訪れた時には自分を通してドイツはこの国を知ったのだ、と吹聴したのを皮肉って、プラトノフは前述の著書の冒頭で次のように書いている。

「ポッペルがモスクワでヨーロッパのためにモスクワ国家を発見したのは自分だと法螺を吹いていた頃、モスクワはすでに外国人たちに開放されていた。アリストテリ・フィオラヴァンティはそこに聖母昇天大聖堂を建立して1479年には完成させていたし、その他の教会も建立し、大砲鑄造に従事したり貨幣の鑄造にたずさわったりしていたのである。その他の外国人の専門家、アントン・フリャジン、マルコ・ルッフォ、ピエトロ・ソラリオとアレヴィシオなども、フィオラヴァンティの助力を得てクレムリンの塔や城壁をすでに建設しおえていた。クレムリン宮殿の石造建築の建造もはじまっていた。

あらゆる《職種》の技術者や親方を募るために、次から次へと使節団がイタリアに派遣された。ロシアの招聘により、また招聘がない場合でさえイタリア人、ギリシャ人、ドイツ人（リュベック出身のドイツ人アルベルトの如き）はモスクワで仕事をするためにやって来た。……ポッペルの発見のおよそ20年前に、モスクワ政府はすでにイタリアの諸宮廷と外交交渉をもち、イワン3世と教皇の宮廷に住んでいたギリシャ人の皇女ソフィア・パレオロゴスとの婚姻が目論まれていた。皇女ソフィアとその一行が1472年にモスクワに到着したときから、モスクワの外国人コロニーの確かな基礎が与えられたのであり、そこから大侯の多くの外交家たちが輩出することになるのである。……これらすべての事例は、15世紀の末までにモスクワの宮廷および市場は西欧との接触をすでに確保していたということ、ロシアが放浪の騎士にあらためて《発見》される必要などさらさらなかったこと、を明白に証明している」⁽⁸⁾

要するに、イワン3世の時代（1462 - 1505 在位）までには、モスコヴィアは西欧人によってすでに《発見》済みであったし、その発見の名誉を担ったのはイタリア人だったということである。リュビメンコはロシア国家について他民族が残した見聞や記録を時代別に比較し、彼らのロシア旅行記を6つの段階に時代区分してそれぞれの段階で主導的な役割を担った民族名をあげているが、それによると、モスコヴィア時代について前半の1335年から1486年までの間の主導権を握ったのがイタリア人で、そのあと1486年から1553年までのそれはオーストリア人に属したという。⁽⁹⁾だがシャルコヴェはこれを批判して、イタリア人の主導権はもっと後まで続いたのであり、「16世紀中頃までずっと、ヨーロッパで得られたモスクワ国家についてのほとんど全ての情報は、何らかの形でイタリアなりイタリア人なりに結びついている」と書いて

いる。⁽¹⁰⁾

実際、16世紀のものも含め当時のロシア関係記録のほとんどはまず最初イタリアで出版され、そのあとヨーロッパ各地に普及していったのである。モスクワ国家に関する16世紀最良の記録とされているのは、マクシミリアンの宮廷から派遣された神聖ローマ帝国使節フォン・ヘルベルシュタインの旅行記、『モスコヴィア事情覚書』（1549年、ラテン語）であるが、このドイツ人による記録さえドイツ語訳より先にイタリア語に訳され、ヴェネチアで出版されたのである（1550年）。⁽¹¹⁾

むしろロシア事情をヨーロッパに紹介する事業が盛んだったからといって、それがイタリアのロシアに対する政治的、経済的、あるいは文化的つながりの密度を直接表現しているとはいえない。しかし14 - 15世紀に限定していえば、政治や経済を含む実際的な関係においてもイタリア諸国家が西欧で最も深くロシアと結びついていたことは否めないし、それは多分16世紀初頭までつづいていた。ドイツ人のモスクワへの流入はノヴゴロドやスモレンスクの併合後にはじまり、とりわけ16世紀の後半に多くなってイタリア人にとって代わるのである。⁽¹²⁾チホミロフは『14 - 15世紀ロシアのイタリア人』という未完の草稿のなかで、「よりあとの時代におけるドイツとの関係の発展が我々のイタリアとの関係の正当な評価をゆがめており、《ネムツィ》が《フリャジ》を覆い隠している」と指摘するとともに、「ロシアのイタリアとの関係がドイツとの関係よりむしろ強くかつ深かった時代があったのであり、少なくとも14世紀から16世紀初めのモスクワについてはそう言えるのである」と書いている。

2

14 - 15世紀のロシアと恒常的な接触を保っていた西欧人には、イタリア人と並ぶもう一つの

グループがあった。ドイツ人を中心とするハンザ商人である。しかし彼らが交易を通して接触したのは《モスコヴィア》のロシア人ではなく、政治的にも経済的にもモスクワの最強のライバルたる北方の都市国家ノヴゴロドのロシア人である。ノヴゴロドはバルト海貿易のロシアにおける唯一（プスコフを除けば）の窓口であり、北方ルートによる西欧貿易の果実の独占者であった。ノヴゴロドのコントーレ（ゴート館）には常住の聖職者のほか、夏と冬の2回に分れてやって来る沢山のドイツ商人がほぼ1年中滞在していたが、彼らがノヴゴロドを出てモスクワなど他のロシア都市を訪れることは絶えてなかった。⁽¹⁾ハンザ商人との交易はノヴゴロド人に完全に独占されていたのであり、モスクワはバルト海による西欧との交流を遮断されていた。⁽²⁾

この点こそが、14-15世紀のモスクワをクリミヤのイタリア植民地に結びつける1つの理由であった。バルト海への道がとぎされていることが、モスクワを黒海や地中海にむかわせる。モスクワ-コロムナーリャザン-ドン河-アゾフ（タナ）-カフファ-スダク-シノベを経てコンスタンチノーブルに到るドン=クリミヤ水路は、14-15世紀モスクワ国家にとって最も重要な国際交易路の1つだった。⁽³⁾バルト海がノヴゴロドに対して果していた役割を、モスクワは黒海やアゾフ海に求めたのである。そしてバルト海におけるハンザ都市の役割を、タナ（アゾフ）、カフファ（フェオドシア）、スダク（スロジ）など黒海とアゾフ海のイタリア植民都市がひきうけることになる。

それゆえ14-15世紀ロシアにイタリアの技術や文化が流入したとすれば、それはモスクワを介して入ったのであって他のロシア都市を経由してではない。この時代のロシア=イタリア関係とはすぐれてモスコヴィア=イタリア関係なのであって、ロシア全般とイタリアとの関係に置きかえることはできない。クリミヤとの交易

はモスクワの独占とは言えないとしても、それに近かった。スダクとの交易に従事する貿易特権商人《スロジャネ》の団体がモスクワだけに形成されたのは偶然とはいえない。⁽⁴⁾

事実、モスクワと黒海岸イタリア植民都市との交易パターンは、ノヴゴロドがハンザ都市との間で行っていた貿易のそれとほとんど同じものである。ノヴゴロドの最大の輸出品は種々の毛皮と蠟で、ハンザからは毛織物、銀、非鉄金属、塩、明ばん、ガラスなどを輸入していた。⁽⁵⁾同様にモスクワがクリミア都市に送りだしていた主要商品も毛皮や蠟であり輸入品も毛織物、金銀、武器、ガラス、明ばん、紙など、非常に似かよった品目構成になっていた。⁽⁶⁾ノヴゴロドとモスクワとは同じ構造の貿易を北と南で2分していたにすぎない。チホミロフの次の指摘はこの点を美事に表現している。

「ノヴゴロドが、その属州やドヴィナ地方やヴォルガ上流地方から搬入される主要商品でハンザ都市と交易したとすれば、モスクワは全く同じ諸商品でイタリア共和都市と取引した。ノヴゴロドとモスクワはそれぞれの交易目標をちがった方向にむけた。ノヴゴロドの交易は北に、モスクワのは南にむいていた。ノヴゴロドがハンザ都市に諸商品を供給したのに対し、モスクワの取引相手はイタリアの共和国ジェノヴァやヴェネチアであった」⁽⁷⁾

このノヴゴロドとモスクワとの同一の貿易構造こそが、14世紀末から15世紀始めにかけて両者の間に生じたドヴィナなど北方領域をめぐる激しい争いの一要因をなしている。⁽⁸⁾ペチョラやドヴィナなどの北方領域は、毛皮をはじめとするロシアの重要な輸出商品の最も豊かな供給地だったからである。この地域の確保はノヴゴロドのバルト海貿易の維持の不可欠な前提であったし、モスクワにとってもクリミア都市との交易を発展させるための重要なポイントだったのである。⁽⁹⁾すでにドミトリー・ドンスコイ

(1350 - 1389 在位) は、イタリア人アンドレイ・フリャジンに北方のペチョラの土地を、「彼の伯父マトフェイ・フリャジンに与えられたのと同様に」という文言で与えかつ安堵しているが、イタリア人へのこうした北方の土地の贈与が、モスクワ侯の対クリミア毛皮貿易政策に関連していたことは容易に想像のつくところである。⁽¹⁰⁾

モスクワがイタリア植民地やコンスタンチノーブルとの結びつきにかけていた交易政策上の比重が大きければ大きいほど、オスマン・トルコが黒海および地中海地域にもたらした政治的変動は、モスクワにとってもまたそれだけ大きな痛手となった。コンスタンチノーブルの陥落について黒海沿岸とクリミアのイタリア植民地も次々にトルコの手陥ちていった。1289年以來ほぼ2世紀の間イタリア人の支配下にあったカフファが1475年にトルコ軍に占領されると、ジェノヴァやヴェネチアによる黒海支配の時代は終わりをつけ、同時にロシアの年代記がアゾフ海を《スロジ海》とか《カフファ海》と呼ぶ時代も終わった。ドン＝クリミア水路による交易は消滅しなかったにせよ、著しく縮小した。モスクワは南方の《バルト海》を失ったのである。

15世紀後半のこの大きな政治的、経済的変動はモスクワの目を再び北に向けさせることになる。コンスタンチノーブルやクリミアがトルコの手に移ったあと、モスクワとノヴゴロドの結びつきは急速に強まり、ノヴゴロドは南に運ばれなくなったモスクワ商品のはけ口になっていた。⁽¹¹⁾ しかし同時に両者の矛盾と対立もますます強まっていった。イワン3世の時代にその決着がつけられた。カフファの陥落から3年の後、1478年にモスクワ大侯はノヴゴロドを併合した。北方の大都市ノヴゴロドの併合というロシア史上の大事件が、南の地中海や黒海での事件と細い糸でつながっていた。

3

15世紀後半は、モスコヴィアが国内の政治的統一をほぼ完了して中央集権国家に成長していくロシア史上の画期である。43年間に及ぶ統治期間を通じて、イワン3世はタタール支配からの最終的自立(1480)を達成し、ノヴゴロド(1478)とトヴェリ(1485)を完全併合し、カザン汗国(1487)を服属させた。イワンによるこれらの主要な戦争と遠征には、必ず1人のイタリア人が参加していた。ボロニア出身の建築家でアリストテリと渾名されたアルベルト・フィオラヴァンティである。クレムリンの大聖堂や城壁などの建築者として余りにも有名なこのイタリア人は、同時に大砲の鑄造師でもあり、また有能な砲術家でもあった。イワンの遠征につき従ったのは、なによりもまずこの大砲技師兼砲術家としてのフィオラヴァンティである。彼はノヴゴロドでも、カザンでも、トヴェリでもその力量を発揮した。⁽¹⁾

ロシア軍事技術史のうえで、イワン3世の時代は大きな歴史的転換期であった。火器の性能と技術が長足の進歩をとげ、大砲が戦争の帰趨を左右する重要な要素になりはじめたのが、ロシアではまさに15世紀後半のことであり、とくに70年代以後のことだったからである。

西欧での大砲の採用の確実な記録は1338年であるが、それは文字通り燎原の火の如くに広まり、14世紀中に全ユーラシアに普及した。最初に大砲が使われた年代を国別にみると、スウェーデン1370年、ドイツ騎士国1374年、ハンガリー1378年、リトワ1382年、ポーランド1383年、トルコ1389年、インド1399年、中国1366年、そしてロシアでは1382年のモスクワ(トフタムシンのモスクワ攻撃のとき防衛軍が使用)でのことである。⁽²⁾

しかし1380年代にあらわれたロシアの大砲も、15世紀前半までは余り決定的な武器にはな

らなかった。1380年から1470年までの90年間をとってみると、大砲が使用された15回の戦闘のうち、この武器が勝敗の結果に影響を与えたのは4～5回しかなかった。都市攻防戦に大砲が必ず利用されるほどにはなっておらず、相変わらず投石器が大砲とならんで用いられていた。ところが1470年以後の50年間では、大砲が使われた20回の戦争のうち、16回まではこの火器によって勝敗の帰趨が決定されている。⁽³⁾かつては専ら都市の防衛用だったものが、この時期には砲架に車がつけられて野戦にも用いられるようになったし、砲弾の貫通力が増したために都市の包囲＝攻撃戦にも必須の武器となった。⁽⁴⁾

むろん、14～15世紀のロシアで火器を使ったのはモスクワ国家だけではない。大砲はトヴェリ、ノヴゴロド、プスコフも所有していた。1400年前後にモスクワを含む上記四都市には明らかに大砲工房が存在していた。武器そのものは土地の鍛冶工が生産するものもあったし、輸入されるものもあった。トヴェリ、プスコフ、ノヴゴロドが入手したのは、ハンザ商人がもち込むドイツからの大砲だった。⁽⁵⁾とくにトヴェリの大砲は技術的にもすぐれ、15世紀前半まではむしろモスクワを一步リードしていた。⁽⁶⁾

ところが15世紀の70年代に入ると、モスクワの大砲は俄然優位性を発揮しはじめる。技術的な改良の1つは果肉状火薬が粒状火薬にかえられ、モスクワ市内で組織的な生産が行われるようになったことである。だがもっと本質的な点は、鉄よりも弾力性に富んだブロンズ製大砲の鑄造技術がモスクワで大きく前進したことである。青銅製大砲は火薬の増量を可能にして砲弾の飛距離と貫通力を大きく伸ばしたし、青銅の鑄造は鉄の加工よりもずっと能率的で短期間の大量生産を可能にしたのである。⁽⁷⁾

そしてイワン3世のためにブロンズ製大砲を必要なだけ確保したのが、ほかならぬポロニアの鑄造師フィオラヴァンティであった。彼は

1475年にロシアにやって来ると、当時まだヨーロッパでも稀な大規模な大砲鑄造マニュファクチャーをモスクワにつくった。フィオラヴァンティのあとから次々にやって来るイタリア人鑄造家たちもこの工房に加わり、西欧の大砲技術をロシアの親方たちに伝えた。1490年から1505年の短期間だけをとってみても、イタリア人とドイツ人を中心にした鑄造師の少くとも四つの集団がモスクワに招聘されている。⁽⁸⁾《プシチェンナヤ・イズバ》と呼ばれたモスクワの大砲工房で鑄造されたブロンズ製大砲の質はきわめて良く、17世紀後半でさえなお使用され続けていた。輸入原料にたよるブロンズ製大砲は高価だったから、16世紀になっても安い鉄製大砲を駆逐してしまうわけではないが、火器製造におけるモスクワの優位はゆるぎないものになった。モスクワとイタリアとの結びつきは、15世紀ロシアの軍事史にも大きな役割を担ったのである。

イタリアの職人たちがつくったモスクワの火器が、イワン3世の戦争の勝利にどの程度与っていたのかを正確に定量することはできない。しかしウグラ河をはきんでタタール軍と対峙した1480年の歴史的な戦争では、火縄銃で武装した歩兵とともに車のついたブロンズ製野戦砲がはじめて大規模に動員されており、これが火器をもたぬタタール軍の戦意を挫くのに与って力があつたことは明らかである。キルピチニコフはこの戦いを「火器が野戦に加わって効果をあげた最初の例」と評価している。⁽⁹⁾フィオラヴァンティに託された大砲と大軍を率いて出陣したトヴェリの包囲戦でも、イワン3世は大いに火器に助けられて勝利したとされている。同じことは90年代のリヴォニアとの戦いでも、1514年のスモレンスク戦にもいえることである。イワンの最初の大事業だったノヴゴロド併合の時はどうか。1478年にイワンが多くの大砲とフィオラヴァンティを引き連れてノヴゴロドに出陣すると、ノヴゴロド市民はパニック状態に陥り、

「モスクワ側の武器は〔戦わずして〕事態の結末を決めてしまった」のであった。⁽¹⁰⁾ それゆえキルピチニコフは次のように指摘する。「モスクワの手中にあった火器は、ロシアの防衛と統一の最も重要な手段となった。1471年に始まるノヴゴロド、トヴェリ、カザン、ドイツのフェッリン、リトワのセルペイスク、スウェーデンのヴィボルクへの遠征において、大砲は攻撃兵器のうちで決定的な役割を担ったのである」⁽¹¹⁾

モスクワはバルト海による西欧との交流から締め出されていたために、イタリア人の媒介で西欧の最新の軍事技術を獲得した。皮肉にもモスクワを北方の窓口から締めだしていたノヴゴロドやトヴェリは、そのためにいささかなりとも自分の死滅を早めることになったのかも知れない。

4

ロシアがイタリア人を介して新導入したものの1つに《紙》がある。8世紀に中国からイスラム圏に伝わった紙の製法は、サマルカンド、バクダッド、北アフリカを経由し、ムーア人の手でスペインに渡るのが12世紀のことである。これをイタリア人が受けついでヨーロッパ中に普及させることになる。ロシアにも、コンスタンチノーブルやクリミア植民地経由でイタリア製の紙がもち込まれる。14世紀前半のことである。⁽¹⁾

ロシア語の紙ブマーガ **бумага** の語源は、ファスマーによればイタリア語の **bambagia**、つまり綿屑を意味する語からの転用である。当時の紙の原料は綿、亜麻、麻などのポロ屑で、綿との関係が深かったからである。⁽²⁾ 事実、ロシア語のブマーガが本来の紙を意味する語として文献に初出するのは15世紀であるが、同じ頃から同時に綿ないし綿屑を表す語としても使われており、現代語でも形容詞 **бумажный** は「紙の」と「木綿の」の2義をもっている。⁽³⁾ この点はヨ

ーロッパ語のほとんどが《パピルス》を紙の語源にしているのと対照的であるが、ロシアでも当時リトワの支配領域下にあったウクライナなど、ドイツーポーランド経由で紙が入って来た地域には《ペペーラ》(**папера**) などの方言が残っている。⁽⁴⁾ ロシア語の紙がパピルス語源でないことは、これが西廻りでなく南廻りでロシアに入ったことを示す1つの証拠である。

モスクワ国家は伝統のある羊皮紙をすてて安い紙を採用する点でも「先進性」を示した。公権力が率先して紙を使い始める。紙に書かれたロシア最古の文書が、モスクワ大侯シメオン・ゴールドィ (1341 - 1353 在位) の1350年頃の文書であるのは偶然ではない。⁽⁵⁾ モスクワ地方では14世紀末に紙の利用が定着しはじめ、15世紀前半には羊皮紙と争いつつも次第にそれを駆逐し、後半には実務的文書の大部分が紙で占められるようになり、16世紀からは羊皮紙の利用がまったく例外的なものになる。しかしこれはあくまでモスクワなど中央地帯でのことである。ロシア北部のドヴィナ地方ではこの後も長く羊皮紙が使われるし、リトワでも16-17世紀を通じて重要文書を羊皮紙に書く伝統を棄てなかった。ノヴゴロドでもなおかなりの間羊皮紙から離れきれないでいた。⁽⁶⁾

北部で紙の普及が遅れるのは、べつにモスクワが紙を独占していたからではない。カフファヤスタク経由で入るイタリアの紙は、14-15世紀を通じてモスクワに搬入された。しかし15世紀からは、リガ、ノヴゴロド、スモレンスクなどを経てフランス製の紙が西から入りはじめ、16世紀中頃までのロシアに普及するからである。⁽⁷⁾ ノヴゴロドやドヴィナなどに紙の普及が遅れるのは、はじめの紙がモスクワ経由の南廻りだったことのほかに、北部にはロシア固有の《紙》である《ベリョースタ》(**береста**) が使われていたからだとは考えられないだろうか。

1950年代以来、白樺文書と通称される白樺樹

皮（ペリョースタ）に刻まれた記録がノヴゴロドで多数発掘されている。11世紀から15世紀までの市民居住地（ポサード）の地層から出土するもので、1977年までに562枚が発見され、現在では600枚を越えたい。ノヴゴロドのほかにも、プスコフ、スモレンスク、スタラヤ・ルサ、ヴィテプスクなど北西部の諸都市でも少数だが発見されている。文書の年代は11世紀から始まるが、モスクワで紙が普及しはじめる14－15世紀頃のものが多いのである。⁽⁸⁾ 16世紀からの文書が全く出土しないのは主にノヴゴロド市内の地層の特殊性によるものだが、独立喪失後の《モスクワ化》でここにも紙が普及しはじめたのかも知れない。しかし紙は羊皮紙より安かったとはいえ、ロシアでは14－17世紀を通じてずっと輸入品だったのだから、白樺の樹からかんたんに採取できるペリョースタほど手軽なものではなかったのである。少くとも14－15世紀のノヴゴロドに紙が滲透しないのは、ここには伝統の羊皮紙とは別に、手軽で安い白樺樹皮を日常的に利用する慣習が根づいていたからだといってよいだろう。

ところで、モスクワの紙とノヴゴロドのペリョースタの使われ方には2つの社会の差が感じられる。モスクワが積極的に導入した輸入紙は羊皮紙にとって代っただけでなく、ロシアの記録文書の量そのものを飛躍的に増加させた。15世紀後半、とくに16世紀からの文書資料の増加は安い紙の普及なしには考えられないが、それはとりわけモスクワ国家権力とその支配の確立のために使われた紙の増加を意味していた。紙はモスクワ大侯の官房の内外で国家的な重要文書を記録するのに率先して用いられただけでなく、中央集権国家としての支配行政上の機能の強化に伴ってますますふんだんに使われた。例えば、モスクワ国家の直接支配下にある土地と人民を握るために政府が15世紀末から17世紀までに作成した種々の土地台帳類は、現存す

るものだけで数千冊にのぼるのである。⁽⁹⁾ 紙は、ここでは何よりもまず税の有効な徴収や農民の土地緊縛のために力を発揮するのである。

独立時代のノヴゴロドにおける白樺の《紙》は、社会的機能の点でそれとは少し趣を異にしている。白樺文書にはノヴゴロド国家が公権力として関与していそうな文書はほとんどなく、市民の私的文書が圧倒的部分を占めている。ノヴゴロドの国家機関は保存の必要ある文書はまだ羊皮紙に書いていたのであろう。白樺文書には、売買証文とか遺言状とか商売や経営上の記帳といった従来から知られている種類の文書もある。だがかなりの部分を占めるのは、ノヴゴロド市民が書いたり受けとったりした日常的で私的な手紙である。⁽¹⁰⁾ 書き手には貴族も商人も職人も属州の農民もいる。夫や父親だけでなく妻や母親の手紙も多い。領主が荘司に与える命令の手紙もあるが、農民や荘司の領主への嘆願状もある。金の催促状もあれば恋文もある。⁽¹¹⁾ それらはモスクワの大量の文書類には見られない種類の記録であり、モスクワが「普及」させた紙にはついぞ書かれなかった文章である。文字も記録の手段も、ここでは僧侶や貴族の独占物ではなく、公権力の支配手段だけにもなっていない。言ってみれば、ペリョースタはまだノヴゴロド人のかなり広い範囲の人々にその日常生活のための一手段として所有され機能していたのである。

イワン3世はノヴゴロド併合の直後、広大なノヴゴロドの属州（5州）全土にわたるロシア最初の土地台帳を作成する。むろん膨大な量の紙を使って。モスクワはこれによってノヴゴロドの併合を完成させる。ペリョースタの消滅と紙の普及はノヴゴロドの滅亡とモスクワの発展でもあった。イワンは青銅の大砲と紙とでノヴゴロドをわがものにした。イタリアの共和国の贈物で、ロシアの専制君主はロシアの共和国を葬り去った。

5

15世紀のイタリア諸国家が対モスクワ関係を重視するようになる第一の政治的要因は、言うまでもなく切迫するトルコの危機であった。ヴェネチアやローマ教皇庁とロシアとの外交関係が、コンスタンチノープル陥落後に急速に活発化するのもそのためである。最後のビザンツ皇帝の姪ソフィア・パレオロゴスとイワン3世との結婚政策を推進したローマ教皇庁の思惑は、ビザンツ帝国の後継者たるの自覚が必然的にモスクワをしてトルコとの敵対関係に導くはずだ、という点にあった。⁽¹⁾ 15世紀後半だけで11回もイタリア各地に派遣されたモスクワの使節団は、大砲製造家や城壁建築家をはじめ優秀な技術者や職人を募っては次々にロシアに連れだした。⁽²⁾ ローマ教皇やヴェネチアがそれを黙認しただけでなくむしろ助力さえしたのは、モスコヴィアにありうべき対トルコ同盟国としての役割を期待してのことであったであろう。

イワン3世の時代にイタリア人技術者の流入が特に多くなり、ヴェネチアやローマとの関係も活発化するが、それはイワンの治世の前半がトルコ＝ヴェネチア戦争(1463－1497)の時期と一致していることと無関係ではない。⁽³⁾ とりわけ戦局がヴェネチア側に不利になり、イタリア全体が危機にみまわれる1470年代になると、ヴェネチア、ローマの使節のモスクワへの往来ははげしくなり、イタリア人関係の記事が年代記のなかに目立つようになる。ソフィア・パレオロゴスがモスクワ入りしたのは1472年のことであったし、フィオラヴァンティたちがやって来たのも1475年であった。⁽⁴⁾

1470年にはエーゲ海のネグロポンテ(エウボエア)が奪取されて戦局はひどく悪化し、イタリアはトルコ軍の直接攻撃をうける危険にさらされた。この時点でヴェネチアは、トルコの東方及び北方の諸国家と同盟してコンスタンチノ-

ープルを挟撃しようという規模壮大な国際的反攻計画をたてた。東からペルシャ軍、北からはオルダールのタタール軍、南の海からはヴェネチアの艦隊でトルコ領に攻め入り、コンスタンチノープル奪還を果たそうというのである。⁽⁵⁾ 外交活動が活発化し、特にペルシャ工作はある程度成功する。ペルシャのウズン＝ハサンの宮廷にはカタリノ・ジェノが派遣されてシャーのトルコ攻撃を慫慂し、ヨサファト・バルバロもペルシャ軍がトルコ攻撃に使う火器のひき渡しのために派遣される。しかしヴェネチアの火器が到着しないうちにウズン・ハサンは攻撃を開始し、ペルシャ軍は小アジアでメフメト2世に破れる(1473)。⁽⁶⁾ この戦闘でのペルシャ軍の敗北の主要因は、火器を持たなかったことだとされる。⁽⁷⁾ ここに到ってヴェネチアは新しい使節アンブロジオ・コンタリニをペルシャに派遣した。⁽⁸⁾ 実は、このヴェネチア人外交家コンタリニが、15世紀のモスクワに関する短い旅行記を残している唯一のイタリア人なのである。⁽⁹⁾

コンタリニは1474年にヴェネチアを發ち、陸路でドイツ＝ポーランド＝ウクライナ＝クリミア＝アルメニアと迂回してペルシャに入った。シャーの宮廷で任務を終えたあと、彼は同じくシャーのもとに来ていたモスクワ大侯の使節マルコ・ロッソに同行してロシアに入り、モスクワ経由で帰路につくことになった。アストラハンでタタール人に捕えられ奴隷に売られそうになったのをマルコ・ロッソに助けられ、ヴォルガを遡ってモスクワに到着するのである。1476年9月から1477年1月までの4ヶ月間をモスクワで過し、イワン3世にもソフィア・パレオロゴスにも会見し、フィオラヴァンティその他のイタリア人とも知りあいになった。⁽¹⁰⁾

イワン3世との第1回目の会見でコンタリニが旅行中に大侯の使節マルコに助けられた礼を述べ、それがロシアとヴェネチアとの友好関係に資するものだという点を口にしたとき、イワ

ン3世は突然怒りの表情を顔にあらわし、コンタリニの言葉を遮り憤然として前のヴェネチア使節トリヴィサノのことで批難しはじめる。⁽¹¹⁾

ジュアン・パティスタ・トリヴィサノは1471年から1474年までの3年間モスクワに滞在したが、彼の任務はモスクワ経由で大オルダーの汗アフメドのもとに行き、タタールを対トルコ同盟にひき入れてコンスタンチノーブル攻撃への参加を実現することであった。⁽¹²⁾ 宿敵タタールとヴェネチアとの結合がモスクワの独立に否定的作用を及ぼすのを恐れたイワンは、トリヴィサノのオルダー入りを許さなかった。トリヴィサノはモスクワ在住のイタリア人の手引きでオルダーに行こうとするが、リャザンで逮捕される。ヴェネチアは再度モスクワに使節を送ってトリヴィサノのオルダー行きを要請して許されるが、タタールのトルコ攻撃はついに実現できなかった。⁽¹³⁾ そしてこの事件の1年後に来たコンタリニは、ヴェネチアとロシアの《友好》を口にした途端、それを苦々しく思い起したイワンの憤激をかうことになったのである。このエピソードは、70年代のロシア＝イタリア外交の主要関心が、ローマ、ヴェネチアにとってはトルコ問題であったのに対し、モスクワ側にとってはタタールからの最終的な自立や国内統一を進めるためのものであったことを端的に示している。

チホミロフによれば、東地中海からペルシャへの武器輸送が不可能になったので、ヴェネチアはロシアを経由し、ヴォルガ＝カスピ海経由でペルシャに火器を送ることを計画した。イワン3世にもこの計画はヴェネチア使節によって提起されたはずだという。⁽¹⁴⁾ そうだとすれば、70年代に大砲製造家などの技術者を自由にモスクワに送り込んだヴェネチア側には、モスクワをペルシャやタタールへの武器供給源にする意図があったのかも知れない。だがそれは空しい計画だったのであろう。イワン3世にとって、火器は何よりもタタールやノヴゴロドと戦うため

にこそ重要な武器であった。1480年の歴史的な戦争は数年先にひかえていたし、ノヴゴロドとの最初の戦いは1471年にはじまっていた。

コンタリニは旅行記のなかで、ノヴゴロドがモスクワとならぶ毛皮貿易の2大中心都市であることを記したあと、「この都市はコムニタスとして統治されている」⁽¹⁵⁾ ことを付記している。コンタリニは1477年の1月に雪のモスクワを櫓に乗って去り、ヴェネチアへの帰途についた。その同じ年の秋、イワン3世は火器をそなえた大軍を率いてロシアの《コムニタス》を滅ぼすための最後の遠征に出発したのである。

注

1

(1) И.С.Шаркова, Заметки о русско-итальянских отношениях XV--первой трети XVI в. "Средние века" вып.34. М., 1971. стр.202-205.

(2) М.Н.Тихомиров, Средневековая Москва в XIV—XV веках. М., 1957. [以下 Средневековая Москва と略記] стр. 125-126, 128-129.

(3) Там же. стр.211-214.

(4) М.Н.Тихомиров, Итальянцы в России XIV—XV столетий. в кн. "Российское государство XV—XVI веков" М., 1973. [以下 Итальянцы と略記] стр.344-345.

(5) S. G. Pushikarev, Dictionary of Russian Historical Terms from the Eleventh Century to 1917. New Haven—London. 1970. p.68.

(6) S. F. Platonov, Moscow and the West. Tr. & Ed. by J. L. Wiczynski. Hattisburg. 1972.

(7) В.О.Ключевский, Сказания иностранцев о Московском государстве.

Петроград. 1918. стр.12-17. バルバロとコンタリニについては, см. Е.Ч.Скржинская, Барбаро и Контарини о России. К истории итало-русских связей. Л., 1971. стр.5-28,64-96.

(8) S F Platonov. op. cit., pp. 1-3.

(9) リュビメンコは(1)9~13世紀頃, (2)13世紀中頃-1335年, (3)1335-1486年, (4)1486-1553年, (5)1553-1600年, (6)17世紀, の6段階に区分する。モスクワ国家についての記述では最初(3)の段階がイタリア人, (4)オーストラリア人, (5)イギリス人がそれぞれイニシアティブを取り, (6)の17世紀では多数の国民の共同作業になったとしている。I. I. Lubimenko, Lerole comparatif des differents peuples dans la decouverte et la description de la Russie. «Revue de synthese historique». t. XLVIII. 1929. pp. 39-43

(10) И.С.Шаркова, Указ. соч., стр.202.

(11) Там же. стр.203.

(12) М.Н.Тихомиров, Средневековая Москва. стр.219.

(13) М.Н.Тихомиров, Итальянцы. стр.342.

2

(1) ノヴゴロドのコントレーヤハンザ商人のロシア滞在の仕方などについては, 関谷清『ドイツ・ハンザ史序説』比叡書房, 1973, 148-150, 233-238頁参照。

(2) それゆえこの時期のモスクワとドイツ等との交易は, リトワ支配下のスモレンスクを介して行われた。М.Н.Тихомиров, Средневековая Москва. стр.138-139.

(3) Дон=クリミア水路について詳しくは, М.Н.Тихомиров, Пути из России в Византию в XIУ—XУ вв. в кн."Исторические

связи России со славянскими странами и Византией" М., 1969. стр.48-77.; его же, Средневековая Москва. стр.122-124.

(4) この黒海貿易商人団体については В.Е. Сыроечковский, Гости-сурожане. М.-Л., 1935. があるが, 筆者未入手。

(5) А.Л.Хорошкевич, Торговля Велико-го Новгорода с прибалтикой и западной Европой в XIУ—XУ веках. М., 1963.

(6) И.С.Шаркова, Указ.соч., стр.205.

(7) М.Н.Тихомиров, Средневековая Москва. стр.136.

(8) ドヴィナ地方をめぐる争いについては, В.Н.Бернадский, Новгород и новгородская земля. М.-Л., 1961. стр.214-221.

(9) А.Л.Хорошкевич, Указ. соч., стр.14.

(10) М.Н.Тихомиров, Средневековая Москва. стр.130.

(11) Там же. стр.136.

3

(1) А.Н.Кирпичников, Военное дело средневековой Руси и появление огнестрельного оружия. "Советская археология" 1957. № 3. [以下 Военное дело и появление と略記] стр.68.

(2) А.Н.Кирпичников, Военное дело на Руси XI11—XУ вв. Л., 1976. [以下 Военное дело XI11—XУ вв. と略記] стр.77-78. ; R. Hellie, Enserfment and Military Chage in Muscovy. Chicago-London., 1971. p. 152.

(3) А.Н.Кирпичников, Военное дело и появление. стр.63-64,67.

(4) Очерки истории СССР. Период феодализма. конец XУ в.—начало XУ11 в.

М., 1955. стр.126-129. ; А.Н.Кирпичников, Военное дело X111—XУ вв. стр.92-94.

(5) А.Н.Кирпичников, Военное дело и появление. стр.63. ; R. Hellie. op.cit., p. 152.

(6) А.В.Арциховский, Оружие. в кн. "Очерки русской культуры X111— XУ веков" ч.1, стр.412-413.

(7) А.Н.Кирпичников, Военное дело и появление. стр.68.

(8) Там же. стр.68.

(9) Там же. стр.67.

(10) Там же. стр.67-68. ; R. Hellie. op.cit., p. 154.

(11) А.Н.Кирпичников, Военное дело X111—XУ вв. стр.80.

4

(1) М.Н.Тихомиров, Москва и культурное развитие русского народа в X1У--XУ вв. в кн. "Русская культура X--XУ111 веков" М., 1968. стр.260.

(2) М.Фасмер, Этимологический словарь русского языка. т. 1, М., 1964. стр.240-241. ; И.И.Срезневский, Материалы для словаря древнерусского языка. т. 1, стр.193.

(3) Словарь русского языка X1--XУ11 вв. вып. 1. М., 1975. стр. 353. ; Д.Н.Ушаков(ред.), Толковый словарь русского языка. т. 1, М., 1935. стр. 203-204.

(4) М.Фасмер, Указ., т. 111, стр.201.

(5) М.Н.Тихомиров, Москва и культурное развитие русского народа в X1У--XУ111 вв. стр.260.

(6) М.Н.Тихомиров, А.В.Муравьев,

Русская палеография. М., 1966. стр. 12.

(7) Там же. стр.13.

(8) В.Л.Янин, Я послал тебе бересту ... Изд. 2-е. М., 1975. стр.5-57.

(9) Г.Кочин, Писцовые книги в буржуазной историографии. "Проблемы источникововедения" т.18. М., 1936. стр. 10.

(10) Л.В.Черепнин, Новгородские берестяные грамоты как исторический источник. М., 1969. стр.15-24.

(11) Л.П.Жуковский, Новгородская берестяные грамоты. М., 1959. стр. 30-87.

5

(1) М.В.Левченко, Очерки по истории русско-византийских отношений. М., 1956. стр.553. ; И.Б.Греков, Очерки по истории международных отношений Восточной Европы X1У--XУ1 вв. М., 1963. стр.165-167.

(2) И.С.Шаркова, Указ. соч., Стр. 206.

(3) М.Н.Тихомиров, Итальянцы. стр. 342.

(4) М.Н.Тихомиров(ред.), Иоасафская летопись. М., 1957. стр.73-89.

(5) Е.Ч.Скржинская, Барбаро и Контарини о России. стр.75-76.

(6) Там же. стр.77-79. また W・H・マクニール (清水廣一郎訳)『ヴェネツィア』岩波現代選書, 1979, 107 - 108 頁参照。

(7) М.Н.Тихомиров, Итальянцы. стр. 343.

(8) Е.Ч.Скржинская, Указ. соч., стр. 86-87.

(9)彼の『ペルシャ旅行記』のうちモスクワ滞在期間の部分。ヨサファト・バルバロの『タナ旅行記』にもモスコヴィアに関する記述があるが、スクルジンスカヤの研究によれば、バルバロはモスクワに行ったことはなくコンタリニの叙述に依拠して書いているにすぎないという。

Е.Ч.Скржинская, Указ. соч., стр.96-106. 158-159.

(10) Там же. стр.225-231.

(11) Там же. стр.106-107,226.

(12) Иоасафская летопись. стр.73,84.

(13) Там же. стр.88.

(14) М.Н.Тихомиров, Итальянцы. стр.343.

(15) Е.Ч.Скржинская, Указ. соч., стр.205,229.

* 本稿は昭和53・54年度科学研究費補助金（総合研究A, 研究代表者 竹内啓一, 課題「地中海地域における集落の形成と発達に関する比較研究」）による研究成果の一部である。